SONRISA

そんりさ vol.178

エクアドル大統領選挙と未来の行方

CODELCO・ENAMI はインタグから出ていけ！の旗

02　エクアドル大統領選挙と未来の行方　……一井リツ子
06　グアテマラ　ADISA　緊急支援から持続可能性へ　……新川志保子
08　回想のラテンアメリカ　ヘスス・ララのこと　……唐澤秀子
10　ラ米百景　「夢のアンデス」―希望と絶望の輪廻―　……伊高浩昭
11　ペルー音楽ペルー・ジャズのあゆみ(2)二人の巨人　……水口良樹
13　メキシコの食巡り　サツマイモとチョコレートのデザート　……ミゲル・アクーニャ
14　ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み　……小林致広

2021年10月16日　日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）発行

エクアドル大統領選挙と未来の行方

一井　リツ子

南米エクアドルは自然の権利を憲法に明記している。しかし、その憲法の制定者であるラファエル・コレア元大統領は開発主義を加速させることになった。彼とその後継者であるレニン・モレノ大統領政権のもと、国際通貨基金（IMF）や、米国開発金融公社（CDF）などからの債務が増大していった。その対応策としてとられた緊縮政策で、ここ数年エクアドル社会は非常に不安定な状況を呈している。2019 年 10 月には、燃料補助金廃止の大統領令に反発して、数万人規模の民衆蜂起が起きた。2020 年の新型コロナウイルスによるパンデミックによって、3 年間で 34%も公衆衛生予算削減が行われていた医療は完全に崩壊してしまった。数多くの新型コロナ感染者の遺体が路上に放置された様子は、国家の縮小とその無力を投影しているかのようだった。

ギジェルモ・ラッソ

ヤク・ペレス候補

アラウス候補とコレア元大統領

エクアドル大統領選挙

2021 年 2 月 7 日に行われた大統領選挙の第 1 回投票では、事前の予測通り、収賄罪で 8 年の実刑判決のため出馬できないコレアの代替候補として「希望のための連合党」（UNES）が擁立した経済学者アンドレス・アラウス候補が 32.7%の得票率で首位に立った。しかし決選投票に進む次点を巡っては、左派の「パチャクティック多民族統一運動党」（MUPP）のヤク・ペレス候補と右派の「チャンス創生政治運動党」（CREO）のギジェルモ・ラッソ候補が僅差で競り合い、10 日ほど揉めたものの、19.74%を獲得したラッソが 19.39%のペレスを抑えて 2 位となった。

銀行家として知られているラッソ候補は、タックスヘイブンの 49 のオフシェア企業と関連して 1999 年から 20 億ドルの富を蓄積していることが『パナマ文書』でリークされた曰く付きの人物である。一方、ペレス候補はエクアドル・キチュア連合（Ecuarunari）の前総裁だった先住民族人権活動家で、水供給の民営化に反対し、キムサコチャ（Quimsacocha）採掘プロジェクトへの反対行動で、テロ容疑で起訴・投獄されたことがある（2011 年）。学者でブラジル籍の妻もコレア政権による政治的迫害で 2015 年に国外追放されたことがある。

4 月 11 日の決選投票は、アラウス候補（開発主義左派＝コレア派）とラッソ候補（右派）との争いとなった。大方の予測に反して、52.51%を獲得したラッソが 47.49%のアラウスに勝利した。この選挙自体が、コレア主義 vs 反コレア主義という側面があり、先住民族左派のペレス候補の票が無効票へ流れたことなどが、ラッソに優位に働いたとされている。

しかし、レニン・モレノ政権下における経済の悪化によって生活に困窮する無数の労働者、開発主義に自らの生存さえも脅かされる多くの先住民族の怒りは極限に達していた。その状況で行われた選挙で真に求められていたのは、現行の経済モデルを変える必要性だったといえよう。大統領選が不正選挙ではないかという見方もあり、ラッソの勝利自体が私には不自然に感じられる。モレノを無能呼ばわりしながらも、ラッソ新大統領が採用するのは、彼と同様な新自由主義路線である。

クエンカでの採掘に関する投票

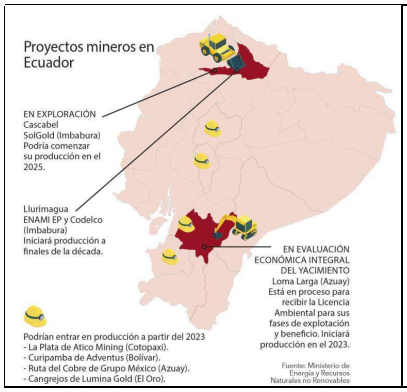
アスアイ（Azuay）県の県都でエクアドル第3の都市クエンカ（Cuenca、住民約58万人）では、第1回投票と同時に、自然の権利を求める住民投票（Consulta Popular）が実施された。最高裁が認可した住民投票では、約34.8万人（有権者の80%）が近隣の5つの河川流域での鉱山開発禁止に賛成を投じた。この住民投票の結果は、「クエンカは水を勝ち取った！」というものだった。この住民投票には法的拘束力があり、リオ・ブランコ（Rio Blanco）社などの企業に認可された40以上の鉱山コンセッションが影響を受けるとされる。

大統領選に出馬したペレス候補はアスアイ県の知事（2019年就任）を務めていた。現行のシステムで保護区にある水源地域や守るべき森林や植生地帯で、採掘活動が独占すべきではないと主張するペレスは、コスタリカやエルサルバドルの例に続いて、鉱物採掘にブレーキをかけるため、国民議会や憲法裁判所に様々な訴訟を起こしている。水源や森林地帯、植生保護地、平野、湿地、壊れやすいエコシステムのある地域での鉱物採掘を例外なく禁止する憲法修正を問う国民投票実施を目指している。さらに金属精錬プロセスにおけるシアン化合物や水銀などあらゆる有毒化学物質の使用禁止も計画しているという。

インタグ地方

首都キトから車で2、3時間ほどの位置にあるエクアドル北西部インタグ（Intag）地方も、クエンカと同じようにアンデス山脈に眠る鉱脈が注目を集めてきた。インタグ地方の85%もの土地が鉱山開発の対象地として譲渡・手続き中であり、それをめぐって、地方自治体や住民らによる攻防が続いている。

エクアドル新憲法には、人間にとっての利用価値などと無関係に、自然が存在・存続する権利が謳われている。2020年9月4日、インタグ地方での鉱山開発に関する「自然の権利訴訟」第1審で原告側が勝利した。クモザルなど数多くの絶滅危惧種、この鉱山サイトだけに生息する2種のカエルの存在もあり、女性裁判官によって、環境に好意的な判決が下った。しかしその後、裁判プロセスに問題があったとして、判決は無効となった。



エクアドルの鉱山開発計画

北がジュリマグア・プロジェクト、南がクエンカ

インタグ地方が位置するコタカチ郡では、豊富な水資源や生物多様性を守るため、南米でも初とされる様々な環境保護の法令が承認されている。2000年の「環境保全郡」、「環境保全条例」のほか、近年では鉱山開発の脅威に対応するため全域を「生命の聖地」と宣言する法案が出されている。大災害を招く不適切な環境下での採掘は企業や投資家にも不都合であると指摘するなど情報発信も行ってきた。インタグ地方では様々な企業による20ほどの鉱山コンセッションがあるが、世界最大の鉱業会社BHPグループ【オーストラリアのブロークン・ヒル・プロピエタリ社と英国ビリトンの二元会社】も試掘開始ができていない。

ジュリマグア・プロジェクト

こうした法的問題とともに、エクアドル鉱山開発公社（ENAMI）とチリ国営銅開発公社（CODELCO）が進めてきたジュリマグア・（Llurimagua）プロジェクトに関しては、この二つの国営企業間での株主採掘権協定に関するスキャンダルがジャーナリズム調査レポートで報じられた。2020年4月16日の報道によると、エクアドル政府の汚職高官とチリのCODELCOの結託により、エクアドル側の利益を剥奪される可能性も示唆されている。実際は鉱山プロジェクトを実施するための合弁企業の設立の手続きも始まっておらず、取り決めではCODELCO側の採掘権も保障されていないなど、プロジェクト参画者のあいだの様々な不一致が表面化している。それ以外にも、国家監査局や護民官の調査で、このプロジェクトでは環境ライセンスが示す義務が果たされず、10以上の不正・違法行為が行われているなど、鉱山コンセッションが失効となる要因が指摘されている。

こうしたことから、ジュリマグア・プロジェクトの試掘は、試掘拡大認可を待ちながら、2018 年 11 月から作業は中断され、エリアは放置されている。こうした環境・法的問題や拒絶にもかかわらず、プロジェクト進展を求めて CODELCO はエクアドル政府に国際調停を起こしている。

新政権の地下資源政策

就任 100 日目のラッソ大統領は、前任者から受け継いだ経済悪化、新型コロナウイルス禍、石油価格下落といった状況を踏まえた景気回復改善策として、石油、ガス、鉱業分野の開発、近代化のための即時実行計画などの抜本的な変革を提案した。これらは業務プロセスの規制緩和に焦点を当て、国内石油生産の倍増、鉱物輸出増加、外国人投資家の勧誘を目指すものだった。大統領は、2021 年 7 月 7 日に法令 95、8 月 5 日に法令 151 に署名した。これらが唯一の選択肢といった感だが、様々な問題を抱えている。両法令は、エネルギー資源省、水・環境省の手続き承認の簡易化、管理上の障害の排除などを目的とし、開発の準備ための環境ライセンスなどの取得メカニズムを加速させるものとなっている。

これらは民主主義の原則、人権および集団、自然の権利を規定する憲法上の保障を無視した危険な政策だという批判の声も上がっている。チリ、ペルー、コロンビアなど近隣諸国でも、規制を緩和したため、法人の悪用、犯罪の無処罰といった現象がすでに生じている。エクアドル全国先住民連合（CONAIE）やエクアドル・アマゾン先住民族連合（CONFENAIE）は、開発に関する事前協議と住民の同意に関する国家の義務を緩和しようとする試みは違法であると、政府当局に警告し、2 つの法令に対し明確に拒否を表明している。

エクアドルは 2019 年 10 月に石油輸出国機構（OPEC）を脱退した。国庫がより多くの収入を必要としていたため、原油生産削減合意に従いたくなかったという。政府試算では、1 バレル 50 ドルの価格で倍増目的を達成できれば、年間 70 億ドルの財政赤字から黒字に転じることができるという。現在、国が採掘する石油は、日産約 50 万バレル弱で、大統領任期終了（2025 年）までに 100 万バレルに倍増させるには、古い油井の産出量を増加させ、新たに約 2 千の油井を開く必要がある。そのために必要となる数十億ドルの投資は民間部門から持ってくるしかない。新たな大統領令では、税金免除と民間石油会社との契約修正が含まれている。業務請負から資本参加、つまり財政的リスクを伴うが、政府が投資する参加型の採掘プロジェクトへと移行する。

エクアドルの石油契約モデルは政権によって変化し、2010 年には 80 対 20 であった企業と国の利益率が、コレア政権のもとで 50 対 50 と変更された。新政府はこれを元の割合に戻すという。つまりコレア政権の利益配分を政府に優位にする方針から、国家の利益率は落ちるが他国からの資本投下を促すラテンアメリカ諸国の古典的な産出モデルともいえるやり方へ変更するという。これは投資家を惹きつける魅力的なものとなると述べている。

新方針のスキャンダラスな側面として、投資家と政府間の紛争解決システムが変更され、当事者間の紛争は歴史的に企業に有利な裁定を下してきた国際仲裁裁判所によって解決されることになる。これにより搾取の影響を受ける開発対象地のコミュニティの正義へのアクセスが妨げられると指摘される。

法令では、国営企業ペトロエクアドルが保有するガソリンスタンドなどを含む生産分野の操業を生産促進と活性化のため民営化するという。ペトロエクアドルは構造上の問題を抱えているが、民間部門へ移行してしまうと、開発対象地にあるコミュニティは、政府へ義務を果たすことを要求することはさらに困難になる。その反面、企業は新たな紛争解決システムによって保護されることになる。

日産 100 万バレルを目指す採掘の突破口を熱帯やアマゾン森林部に開こうとする意図に対し、パチャママ財団のマリオ・ロメは次のように批判する。「アマゾンの中央部や南部のパスタサとモロナ・サンティアゴ県での計画は、生物多様性と非常に素晴らしい状態に保たれているアマゾンの森林という国の豊かさに対して犠牲を強いるものになる。国がアクセスしたい土地には 7 つの先住民族が生活している。すべての地域が保護区ではないが、先住民族の土地である。法律はいかなる活動であれ、先住民族の土地に事前協議の権利を与えてい

る。しかし歴史的に順守されていない」

環境団体アクシオン・エコロヒカ代表の生物学者アレハンドラ・アラメイダはこの公式計画に懐疑的である。「エクアドルでフラッキング【水圧破砕法】の使用を始めるとも言われている。しかし、それは行われたことがなく不可能で、恐るべき影響があるだろう。100 万バレルの生産目的も同様で、エクアドルはこの量の輸送インフラを持たない。新たにパイプラインを建設するなど考えられない」と。

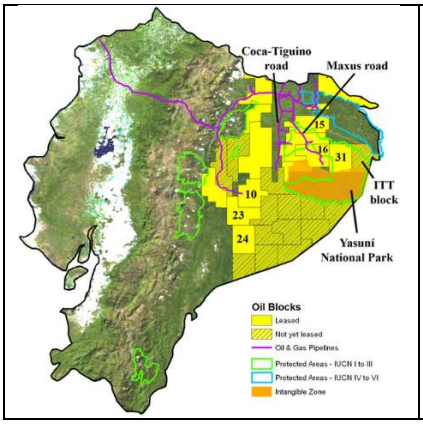
今年後半には、アマゾンの保護区ヤスニの ITT（イシュピンゴ・タンボコチャ・ティプティニ油田の頭文字）の区画での新たな２つのボーリング実施計画が明らかとなっている。アラメイダは、「イシュピンゴでの計画があるが、これはヤスニの立ち入り禁止区域の緩衝地帯であり、これはラッソ大統領が選挙キャンペーンにおいて述べた事柄の一貫性のなさが示されている。大統領は、保護区では採掘しないし、共同体の事前協議を抜きにして、開発は行わないと言っていた」

鉱業部門では、「違法採掘と戦う」ための予備戦略が実施されると発表された。採掘管理と公共の安全を担当する様々な「責任ある」政府機関との協力を通じ、違法な採掘活動に対して領土占領、介入活動が行われることを意味する。法令 151 では、先住民族の土地の軍事占拠、違法採掘によって生じた人権侵害の無視が促進されることが予想される。こういった二義的な法的手段を用いながら、政府責任の回避と強引な地下資源の搾取、多国籍企業や投資家へのたたき売りは、結果長期的には財政の安定した収入源の喪失を意味する。

憂慮すべき伐採や森林破壊の拡大、汚染源を増大させる採掘活動を推進していくことは、パリ協定における政府のコミットメントとして、気候変動に関して、化石燃料の使用を大幅かつ敏速に削減するという目標を脅かすもので、世界的な批判を免れることはできない。

背景となる鉱物需要

その背景にあるのは、私達のような先進国を中心とした消費活動なのだが、日本に至っては鉱物資源のほぼ 100%を中南米やオセアニアなどの国々からの輸入に頼っている。日本は、ベースメタルの銅の 45%（2016 年）を



アマゾン地域中部のヤスニ国立公園保護区と、南部のパスタサ県、モロナ・サンティアゴ県の石油開発計画

チリから輸入しているが、前述のインタグ地方のジュリマグア・プロジェクト（銅・モリブデン採掘）は、チリの国営企業 CODELCO が推進する初の海外採掘事業である。皮肉にも私達が、エクアドルの社会環境の喪失・破壊と無関係ではないことを感じさせられる。

現在、銅は希少資源と称されるほど枯渇が懸念されている。伝導率が高く電子機器の生産に不可欠な銅は、電気自動車（EV）生産ではガソリン車の 3～4 倍も必要とされる。そのため、地質学的にも危険性の高い開発すべきでない途上国の熱帯雨林や生物多様性に富み先住民族が暮らす地域にまで、鉱山開発がどんどん拡大している。また、巨大な EV 市場を目当てに、銅以外にも多くのレアメタルの過度な需要が懸念される。

人権・労働条件・腐敗などの問題から地域住民、NGO の反対によって開発の期間が長期化するため、開発費は高騰していく。それに対応するため、開発企業は安全性や賠償金といった経費を益々削減するであろう。貧困や生活の改善という名目のもと、すべての生命に過酷な苦しみを強い、時に死をももたらす地下資源の採掘を短期的な解決策として安易に過剰促進させるべきではない。

エクアドルの高いポテンシャルである世界に誇る生物多様性、その長所をいかに持続させることができるか否は、エクアドルの未来の姿にも重なる。今後のグリーン・ニューディールといった温暖化対策には、慎重な検討が不可欠である。アマゾンやアンデスをはじめ世界各地に存在する決して人間には形成できない豊かな生命循環システムが崩壊、喪失されることがないよう、私は真に願っている。

グアテマラ　ADISA　緊急支援から持続可能性へ

新川　志保子

レコムがここ数年支援しているグアテマラの障がい者支援団体 ADISA の活動について、昨年からの新型コロナウィルス危機以降、現在までの状況を以下に報告したい。

コロナ感染状況

ADISA があるサンティアゴ・アティトラン市は、依然としてコロナ赤信号のままである。春からデルタ変異株が入ってきてまた一気に感染者が増えた。しかし、検査体制も整っておらず、また長い緊急事態に疲れてマスク着用、他人との接触回避などの予防策を取らなくなった人も多い。ワクチンも行き渡っておらず、また宗教的な理由などでワクチン拒否をする人もいて接種はあまり進んでいない。政府の統計に現れない感染者が多いので、実際にどのくらいの人が感染しているかはわからない状況だという。

だが、コロナ以降、明らかに死者は増えており、以前はそれほど頻繁ではなかった埋葬が現在は毎日あるのだという。1 日に４人の埋葬があったこともあり、死者の多くはコロナ感染によるとしか考えられないということだ。

ADISA のコロナ対策

ADISA は、オフィス入り口に手洗い場を新設しトイレの数も増やした。受付には透明のパネルをつけ、建物内では人と人が距離を取りやすいように廊下にテープで印をつけている。消毒も徹底して行っているし、ゴミ処理にも注意を払っている。訪問者にもマスクや手洗いをしてもらう。子どものセラピーは、現在は対面でできるようになっているので、グループセラピーの部屋を広くして間隔をあけ、通気も良くしている。

オフィスに来られない場合は、換気が十分にあるか、戸外でできるかなどを確認してスタッフが家庭を訪問して行う。また、障がい児を抱える家族が孤立しないように、電話や SNS での連絡を緊密に取っている。また、感染予防や、障がいについての説明、家庭でどんなことができるかなど、スペイン語とマヤ語で動画を作り公開している。

セラピーの様子

2020 年からの緊急支援

コロナ禍で昨年春に途絶えた観光客も戻らないままで、観光関連で生活しているアティトラン市の多くの住民は収入の手段もないままだ。ADISA が支援している障がいのある子どもの家庭多くも一層生活が困窮し、食べるものがない事態にもなった。ADISA はマスクや手洗いのための石鹸、消毒液などを配り始めたが、こういったコロナ予防関連の物資だけでなく、まずは生き延びるための食料援助が必要ということで、急きょ食糧支援も開始したのだった。

もともとグアテマラは子どもの半数近くが慢性的な栄養不良という国なので、さらに食料事情が悪くなれば子ども、特に障がいのある子どもが真っ先に影響を受ける。

ADISA の活動はそのほとんどを欧米の NGO や財団からの助成でまかなっているが、さいわい昨年はそれに加えてコロナの緊急支援があちこちから送られてきた。日本からも、レコムが緊急支援キャンペーンを行ったほか、日本カトリック大阪司教区のシナピスこども基金からも支援があった。これらの緊急支援金で、ADISA はすぐに 150 家族分の食糧支援を開始したのだった。

親の会を組織

支援物資の迅速な配布とコロナ予防の周知を徹底するために、ADISA はコミュニティごとに親の会を組織することにした。すでに ADISA は障がい児のセラピーやケアだけでなく、親へのサポートも行っていたので、そこから親の会を作るのは難しくはなかった。

昨年秋からは緊急事態の規制が少し緩和され、10 人までの集まりはできるようになっているので、親の会もメンバーを 10 人までとした。親の会からはコミュニティや各家庭の状況を知らせてもらい、ADISA は、それを参考にしながら、支援物資の準備、配達などを行うようにした。現在はアティトラン市とその周辺で 10 の親の会があり、250 家族が参加している。

持続可能な途を探す

しかし、緊急支援はあくまでも「緊急」の支援なので、ずっと続くわけではなく、コロナ禍はいつまで続くのか見通しがたたない。そこで、食料支援を行うかたわら、支援が終わっても貧困家庭でやっていける持続可能なやり方を模索することになった。

家庭菜園プロジェクト

まずは、食料を少しでも自給できるようにするための家庭菜園のパイロットプロジェクトだ。まず 25 の家庭を選び、使える土地がどのくらいあるかなど、それぞれの状況を見極めながら基本的に 4m x 2 m で始めることにした。農業技術者の指導を受けて、菜園が作れるようにし、短期間で収穫できる野菜、作りやすい野菜の種苗と当初の肥料などを提供する。

これまでに作った野菜は、ニンジン、二十日大根、ほうれん草、玉ねぎ、きゅうり、キャベツ、レタス、ブロッコリーなどだ。二十日大根やレタス、トマトなどはすでに収穫しているそうで、サラダにして子どもに食べさせたという報告が届いているという。新鮮な野菜をいろいろと日常的に食べられるのは、自給というだけでなく栄養の点からもよい。その後さらに 25 家族の菜園を作り、現在は 50 家族が菜園をやっている。

マイクロクレジット

町中に住んでいる人は、菜園を作りたくても場所がなくてできない。そこで、小規模の融資を行い、雑貨や食料品を売る商売ができるようなスタート資金を用立てるというアイディアも出た。当面は無利子で、数人に融資して、その返済状況などを見極めてから、規模を広げようということになっている。

家庭菜園の様子

家庭菜園の報告と感謝の言葉

鶏の飼育

その次に出たアイディアは鶏の飼育だ。ADISA の中には若者組織があり、障がい者が経済的に自立できるようにいろいろ努力している。リサイクルの紙で作った袋や皿、ボール、アクセサリーというような物作りから始まったが、最近は小規模ながらも鶏の飼育も始めている。卵を採って売るためだ。

だんだん軌道に乗り始め、町のレストランやお店に卸すまでになっている。鶏小屋はトウモロコシの茎や廃材などを利用してなるべく自前で作り、鶏の餌は食べ残りのトルティージャなどやはり買わずに住むように工夫している。このノウハウを生かそうということになった。

基本的な考えは、1 家族に雄鶏 1 羽、雌鳥を 5 羽提供し、小屋作りや飼料の作り方なども指導して飼育してもらうというものだ。採れた卵はそれぞれの家庭で消費し、さらに孵化させて鶏の数を増やす。数が増えれば売って現金収入にもなる。これは資金調達の目処がたてば始めることになっている。

行政があまり機能していないのがそもそもの問題だが、ADISA は、農牧省や食料安全栄養庁、アティトラン市に粘り強く働きかけ、菜園の技術支援や種苗の提供などできるだけのサポートを受けるよう努めている。

回想のラテンアメリカ（連載11）

ボリビア２　ヘスス・ララのこと

唐澤　秀子

本の友社

ラパス市でボリビア関係の書籍がよく揃っている書店に出会いました。Los Amigos del Libro（本の友）というのです。Encilopedía Boliviana（ボリビア百科全書）という、神話上の動物をデザインした表紙のシリーズが目を引くのですが、出版社の名前も Los Amigos del Libro です。出版社が経営する書店なのでしょう。そのなかで、Mitos,Leyendas y Cuentos de Los Quechuas（『ケチュアの神話、伝説、民話』）という１冊に気が付きました。小さな判型ながら 448 ページに及ぶこの本には、神々という見出しのもとにワロチリの神話の数編が入っていたのです。神話のなかでも土地の人が語ったインカ以前の古い神々の物語だという解説もあります。ケチュアの神話などがこれだけまとまっている本に出会ったのは初めてのことでした。この書の編訳者ヘスス・ララ、私にとっては初めて聞く名前です。宿に戻って辞書を引きながら読んでみると、ペルーで友達になった人たちに聞いた話も出てきます。そればかりではなく、ケチュアの民の神話、伝説の広い世界の一端に触れることができた喜びと同時に、これだけたくさんの伝承文学を翻訳しているヘスス・ララという人にも興味がわきました。

コチャバンバへ

ラパス市に落ち着くことができたので、コチャバンバからサンタクルス、帰路はコチャバンバからオルロを回る旅をすることにしました。コチャバンバは気候も穏やかで雰囲気も落ち着いていて、ラパスの活気とはまたちがう感じがします。先住民やメスティーソの多いラパスに比べると、外見はヨーロッパ系に近い人がかなり多く、家々も立派で、裕福な層が多いようです。出版社としての「本の友」社はここにあり、さっそく訪ねてみました。書店も併設されており、ラパスの店よりはやや小さいけれど、本がきちんと整理され、数も多くそろっていて、とても古典的な本屋らしいお店です。ドイツ語の雑誌が多く、お店にいたのは、初老のドイツ人らしい女性だったことから、このお店はドイツ系の人が運営しているらしいと分かります。手元にあるカタログをみると、Encilopedía Boliviana の企画担当者はドイツ名です。この女性にこのシリーズに興味があり、日本で翻訳出版を考えたいので、担当者のグーテンタークさんにお会いし相談したいことを伝えると、では明日にということになりました。

『ケチュアの神話、伝説、民話』

私は記憶していなかったのですが、太田は、メヒコですでにヘスス・ララの著作『ゲリラ戦士インティ・ペレード』をメヒコのディオヘネス版で読んでいました。インティはゲバラのゲリラ隊に参加していたひとですが、そんなゲリラ兵士の伝記を書いたヘスス・ララに会う機会を願っていたけれど、軍政のもと、不用意に外国人がゲバラのゲリラ戦に関わりのある人に面会を求めたりすれば、周りに迷惑をかけることにもなりかねない、と危惧していました。

その頃ボリビアでは宿を決めると、宿で警察署に出頭するように言われていました。何の目的か、翌日はどうするのか報告しなければならないのです。ある時など、疲れていて翌日に延ばしていたら、宿の人はやきもきと心配し、「出頭」してみると、冷たい調子でお前たちを探しに行こうとしていた、と言われたことがあったほどです。コチャバンバを訪れた 1975 年の前年には、バンセル軍事政権のとった経済措置に反対し、農産物の価格引き上げを要求する農民がコチャバンバ渓谷で抗議の道路封鎖を行ったのですが、軍隊が出動し、死者は 80 人から 200 人に達したと言われますが、正確にはわかりません。「トラタの虐殺」として記憶されているのです。旅行者にはうわべは平穏な落ち着いた町のように見えるのですが、少しずつ思いがけないほど厳しい現実が迫ってきます。

ララとの邂逅

翌日、書店に行き、グーテンタークさんに、ヘスス・ララのケチュアの神話の巻とても興味があり、日本に帰ったら翻訳出版を考えたいので、お会いして相談できれば嬉しい、と頼んだところ、「ドン・ヘスス、日本からあなたに会いたいという人が来ているよ」と、気軽に電話をかけ、すぐ翌日の３時に

会う約束を取り付けてくれたのです。約束の時間にララの家を訪ねてみると、ずいぶん簡素な家、という感じです。出てきた青年に招かれて中に入ると、家は奥行が深く、中庭を抜けて奥にある書斎で彼は待っていてくれました。1898 年生まれなので、その時は 77 歳だったはずです。背の高い痩せぎすの人でした。とりあえずは初対面の挨拶と自己紹介をし、まずは『ケチュアの神話、伝説、民話』を日本に紹介したいので、許可をお願いしたいと話すと、私のこの小さな努力が日本の読者の目に触れることになるなんて、意外なことでもあり、嬉しいことだと大変喜んでくださったのです。クロニスタ達によって残された文章に目を通すばかりでなく、先住民であるケチュアの人びとの文化的な意味など認められもせず、ギリシャ神話が得ているような古典としての価値など、なおさら認められてはいなかったころ、その価値を認め、現代のスペイン語に翻訳し、世に出すことがどれほどの熱意と力を必要とすることか、想像に余りあるものがあります。

ララとインティ

この話が終わったところで、太田がメヒコからボリビアまでの私たちの旅をかいつまんで話し、各地で先住民の自分たちの尊厳、文化、土地を回復しようとする運動に出会い、共感している。そしてインティ・ペレードに関する著作をメヒコ版で読んだが、ボリビアでは発売直前に官憲に押収され、焼却されたという話を聞いたのだがと話しだすと、彼は、「自分はいま常時監視されていて自由に動くこともできない。ここをいつ再び捜索され逮捕されるかもわからないので、ここには差しさわりのないものしか置いておけない」と言い、机の引き出しのカギをあけて1枚の写真を取り出して見せてくれました。

そこには半分焦げた本が写っていました。焚書処分にあって大量に焼かれた時、一番下の方にあったものが辛うじてこんな状態で残ったのだそうです。まさに『ゲリラ戦士 インティ・ペレード』、インティ【ゲイド・アルバロ・ペレード】の評伝です。「ゲバラと一緒に戦い、ゲリラ部隊がほとんど壊滅させられた後も、生き残ってラパスに戻り、ゲリラ闘争の継続を訴えていたが、軍警察に発見され、殺されてしまった。彼はほんとうに優れた人物だった。彼も共産党員だったし、私の娘の夫だった。幼い子どもがふたりいる。彼らはキューバで暮らしている」。

机のうえに 1 枚の写真が置いてありました。その娘さんとふたりの子どもの写真です。「私もゲリラ戦のニャンカウアスーの準備段階からすべてを知っていたが、この闘争を裏切った共産党は許せなく、離党した。逮捕され、知っていることを話せと尋問された。拷問も受けた。1 日目はただ耐えて黙秘していた。それから自分の内にひとつのストーリーを作り、どこからつつかれてもぼろが出ないような、完璧なストーリーに作り上げた。なんど尋問され、どうされようとそのストーリーを繰り返し、とうとうあちら側が負けた。私を密告した男は、何がなんだかわからんようになって、恥ずかしそうな顔をしていた」

そんな話をして、ララ氏の家を辞した翌日、再び彼の家を訪ねて、コロンビアの先住民の機関誌を渡すと、自分宛ての郵便物はすべて検閲されるので、こんな情報は得られない、仲間にも回してみんなで読もうととても喜んでくださった。

後に知ったことですが、彼は貧しい生まれで、家族はスペイン語を話さず、ケチュア語を話していた。10 歳で学校に通うようになってスペイン語を学び、詩を書くようになったことから、出版局の仕事を得て、詩集も出版された。小説作品も多く、ケチュア語で書かれたものもある。ボリビアとパラグアイの間で戦われたチャコ戦争に従軍した経験は、“Repete”（1937 年刊）と題する小説となり、その内容が軍の怒りにふれ、禁書となった。またゲバラのゲリラ戦をテーマにした小説“Ñancahuazu, sueños”（1969 年刊）も禁書とされ、地下でひそかに回し読みされた。また『ケチュア語スペイン語辞典（1971 年刊）を編纂し、言語学的な研究も行っているなど、その仕事は広範囲にわたっています。なかでもケチュア文化、ケチュア語に関する理解と研究は際立っているのではないかと、思いました。

お会いした時は 77 歳、過酷な体験から病を得ながら、なお屈することのない明晰な精神の強さを感じさせるヘスス・ララ氏【1980 年 9 月 6 日没】。いま振り返ってみると、民衆の側で戦い続けたボリビアの現代史の生き証人のひとりにお会いしたのだという思いが強くします。

連載(第80回)　ラ 米 百 景　　伊高 浩昭(ジャーナリスト)

「夢のアンデス」―希望と絶望の輪廻―

チリ人映画監督パトリシオ・グスマンの2019年作品「夢のアンデス」(原題「夢の大山脈」)を観た。無論、南米で「ラ・コルディジェーラ（大山脈)」と言えばアンデス山脈にほかならない。この映画は「光のノスタルジア」「真珠のボタン」に続く三部作の３番目で、私はチリクーデター48 周年記念日前日の９月 10 日、東京・渋谷の試写会場で時宜良く観た。コロナ疫病 COVID19 が醸す煩わしさと外出する億劫さから 20 ヶ月以上、映画鑑賞から遠ざかっていたが、これは観ないわけにはいかないと発心し出掛けたのだった。

グスマンは 1973 年９月 11 日の軍事クーデター直後、その前年からの「チリの闘い」撮影などから睨まれていたため一時期迫害された。解放されると、フィルムを守り制作の自由を確保するため、パリに去った。その後の作品は一時帰国して制作しても、「祖国を遠望する思想」（筆者の造語）と遠近法を踏まえたものとなり、その最たるものが最新作「夢のアンデス」だ。老境も 80 歳の佳境に至った監督は、太古から現代までチリの動静を見守ってきたアンデスの「不変」と「過去を記憶する地層」を探求しつつ、懐念（サウダーディ）に駆られ、作品を「あのクーデター前のチリは還らない」の言葉で締め括る。

監督は遠大なアンデスを、最高峰アコンカグア（標高 6960m）をはじめ名のある高峰を特に映し出すことなく、コンドルが舞うように、あるいは夢遊病者のように漠然と描く。高く低く、行きつ戻りつしながら鳥瞰する不思議さを、私はしばし味わった。

サンティアゴとブエノスアイレス、リマとラパス、そしてパナマ地峡からマゼラン海峡まで。。。アンデス上空を縦に横に何十回も飛行した私だが、コンドルの眼で俯瞰したのは初めてだ。この映画を観ながら私は、クーデターに終わったアジェンデ時代のチリや、さまざまなラ米の出来事を現地取材や遠近法で 55 年間観察してきた自分の来し方を回想していた。脳裡の回路が混線しないよう何度も注意しつつ。

ところで「夢のアンデス」が 2019 年に作られたのは偶然ではない。この年 10 月から 2020 年３月にかけてチリ全土で、新自由主義経済路線によって生じた巨大な貧富格差と社会的不正義に強烈に反逆する大学生ら若者が蜂起し、富豪大統領セバスティアン・ピニェーラの率いる保守・右翼政権を崩壊の瀬戸際まで追い込んだ。本作にも登場して語るチリ在住の映像写真家にして映画監督のパブロ・サラスの手腕によるものか、チリ経済のいびつな繁栄を物語る高層ビル群の谷間で何万人もの若者らが洪水の如く行進したり、カラビネロス(準軍警察部隊)に弾圧されたりする場面がふんだんに出てくる。

1973 年クーデター後最大の街頭動員となったこの蜂起の結果、国民投票とジェンダー平等の制憲会議（CC）代議員選挙が実施され、2021 年７月から CC が新憲法起草作業を続けている。1980 年制定の新自由主義に立つ軍政憲法に替わる民主憲法は早ければ2022 年内に制定される。グスマンは2019 年蜂起の初期の映像を盛り込んだことで、新憲法制定に繋がる近未来を先取りしたとも言える。掌の孫悟空を見守る釈迦のように、チリの行く末を見守るアンデスをグスマンは少しばかり喜ばせたのだ。

チリでは 2021 年 11 月 21 日に大統領選挙がある。主要候補は左翼・中道左翼、中道・穏健保守、保守・右翼の３陣営の３人だ。1970 年の大統領選挙も同傾向の３候補が争い、得票１位のサルバドール・アジェンデが国会での決選に勝ち、大統領となった。だが３年後に押し潰された。半世紀近い隔たりのある今、パラダイムの変化が乏しいのか、政治的状況は繰り返されている。

私が「夢のアンデス」を観た日、豪州秘密情報局（ASIS）が 1971 年から 1973 年まで、CIA に要請され、サンティアゴに秘密拠点を設け、アジェンデ打倒工作のための諜報活動に加担していたという、おぞましい事実が明らかになった。9 月 17 日には、サンティアゴのサンホアキン地区のアジェンデ立像と台座が赤ペンキでひどく汚された。台座には、クーデターの日、アジェンデが反乱軍の爆撃で炎上する大統領政庁内で自害する直前に、ラジオを通じて伝えた最後の演説の言葉が刻まれていた。

【「夢のアンデス」　2021 年 10 月 9 日から 11 月 19 日まで東京・神田神保町の岩波ホールで公開】

連載(第 77 回) 音楽三昧♬ ペルーな日々　　水口　良樹

ペルー・ジャズのあゆみ (2) 二人の巨人

さて、少し間が空いてしまったが、前回（そんりさ 176 号）に続き、ホセ・イグナシオ・ロペス・ラミレス・ガストンのペルー・ジャズ史の論考をたたき台に、ペルー・ジャズの歩みを追いかけていきたい。

なお、2 回にわたりと、前回は書いていたが、どうやら 2 回では終わらないということが、今回判明した。そのことを始めに断っておきたい。

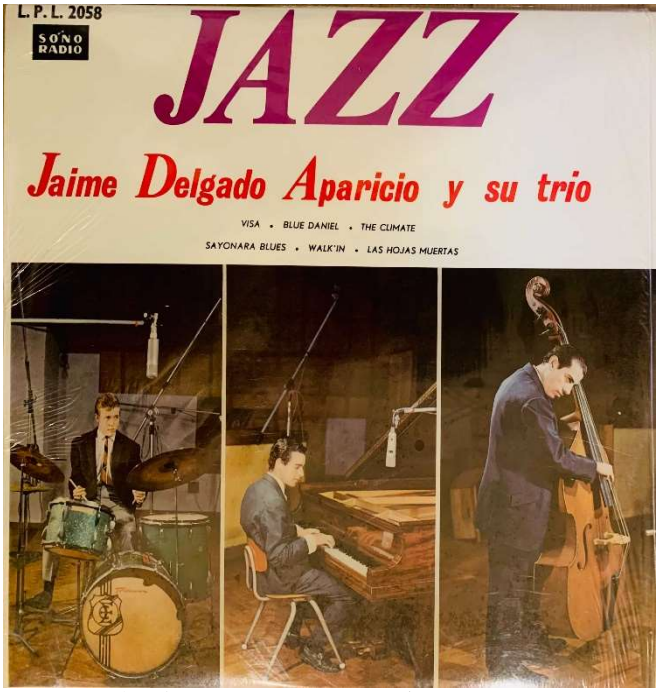
さて、前回はペルーのジャズ黎明期から、それらの影響がムシカ・クリオージャやアンデス音楽にどのように波及していったのかという話をご紹介した。

今回は、1960 年代から 1970 年代にかけてのジャズのメインストリームの成熟期をご紹介して、次回は 1990 年代以降のサウスアメリカン・ジャズとしてのペルビアン・ジャズがどのように生み出されていったのか、へと続けていければと思っている。

さて、ペルーの首都リマのアマチュア・ジャズ・シーンは、1922 年の郊外のリゾート地のカジノやホテルなどから始まり、大学のジャズバンドなどへと派生しながら多くの人に生の音楽としてのジャズ体験を提供した。こうした経験を通して、各地の民衆音楽にもジャズの影響が深く入り込んでいくことになった。

そんな中、やがてリマの新市街ミラフローレスにドイツ人やスイス人たちが中心となって作られたジャズ・クラブ、アストリア・ジャズ・クラブが誕生した。リマの音楽家たちの出会いの場となったこのクラブは、1950 年代のジャズシーンにとってもっとも重要な場となり、そこで結成されたアストリア・オールスターズはペルーのジャズ史にとってスキップすることのできない存在となったのだという。

そして 1960 年代に入ると、ペルーのジャズ・メインストリームに二人の巨人が登場する。ハイメ・デルガード・アパリシオとニロ・エスピノーサの両名である。そして同時進行的にペルーでは、ロック、ブーガルー、ボサノヴァ、クンビアなどが新たなジャンルとして立ち上がりつつあり、ジャズはこうした新しい音楽と密接に絡み合いながら新たなシーンが作られていった。



ハイメ・デルガード・アパリシオ・ジャズトリオの LP 盤 (1964 年)

アメリカのウエストレイク現代音楽大学で学位を取ったハイメ・デルガード・アパリシオは、1961 年にペルーに帰国した後、精力的にアストリア・ジャズ・クラブやセグーラ劇場などでライブやジャム・セッションを行うことで、ペルーのジャズ・ミュージシャンたちが本場仕込みのジャズに触れる機会を作っていった。

その後も再びアメリカのバークレーで学びながら、ニューヨークやペルーで音楽活動を続けた。彼はジャズだけでなくツイストやロックンロールバンドを結成して活動も行っており、こうした横断的活動がペルーの新しい都市音楽を醸成していく大きな原動力になったのだろう。

1966 年にペルーに戻ると、本格的にジャズの活動をするためにハイメ・デルガード・アパリシオ・ジャズ・トリオを結成し、トリオ名義のレコードやジャムセッションのレコードなどを制作している。さらに 1970 年にはペルーのレコード会社ソノ・ラディオの音楽監督に就任し、ジャズだけで

なく、サイケデリック・ロックおよびプログレッシブ・ロックの普及に尽力した。

その最大の成果とされるのがブラック・シュガーとトラフィック・サウンドだ。ハイメ・デルガードが成立に深く関わったブラック・シュガーは、サルサ誕生直前のブーガルーをペルー的に解釈したとも言われ、ラテンソウルやジャズファンクのバンドとカテゴライズされることが多い。そしてともにシーンを盛り上げる形で関わったのが、ジャズを取り入れ、デスカルガ（即興的セッション）を得意としたプログレロックのトラフィック・サウンドだ。

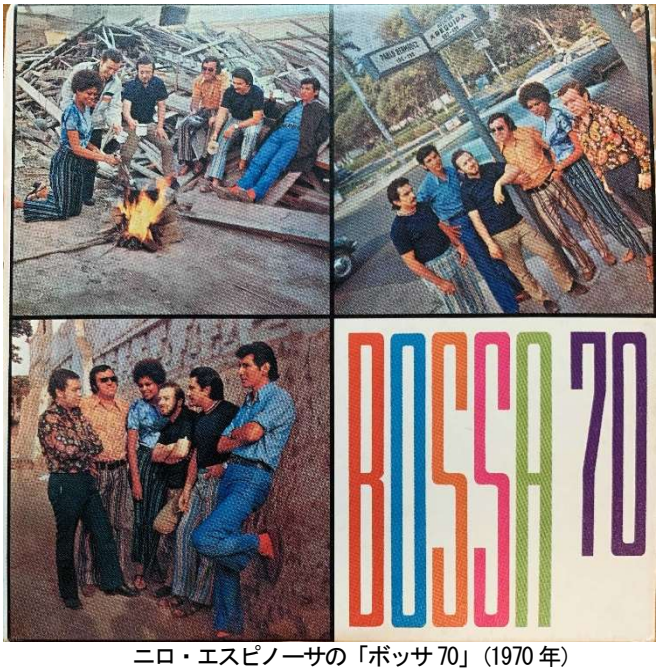
この時代はこうしたロックだけでなく、ペルー・クンビアの父エンリケ・デルガードがロス・デステージョスを結成してペルーのクンビアを本格的に始動させるなど、新しい都市音楽が次々と生み出されたまさに黄金時代でもあった。

ところがこういう音楽がいよいよこれからという時に、ベラスコ将軍による軍事クーデター（1968 年 10 月）が起こり、1970 年代半ばにはロックに対する圧力が高まり、アンダーグラウンド化していくことになった（ジャズは市場も小さくラテン化も進んでいたため、大きな問題とならず、ホテルなどでのステージを続けていたようだ）。

このように多くの音楽家たちを育て世に送り出したハイメ・デルガードであったが、なんと 1983 年に 40 歳の若さで亡くなっている。

そして、もう一人のキーマンであったニロ・エスピノーサ。サックス&フルート奏者であった彼は、ペルー国立音楽院からバークレー、そしてベルリンの音楽大学を経て 1962 年にリマで活動を始めた。翌年にはアストリア・ジャズ・クラブの公式メンバーとなり、さらに 1966 年にジャズとボサノヴァをベースに、ソウル、ファンクなどを取り入れた「ヒルトンス」を結成し、ホテルなどを拠点にダンス音楽を中心に演奏活動を行った。

さらに 1968 年にはバンド名を「ボッサ 70」へと変更し、1970 年にレコードを制作している。この「ボッサ 70」は、日本でもレコードや再発 CD などが一時期出回っていたので、知っている人もいるかもしれない。代表曲はバーデン・パウエルのボッサの名曲「ビリンバウ」のカバーだが、ジャズの名曲からオリジナルも入っている多彩なアルバムになっている。ブーガルーの曲も作っており、同時代のブラック・シュガーなどとともに、アメリカのラテン音楽を積極的に取り入れ、新たな時代を先導していったバンドとして知られている。



ニロ・エスピノーサの「ボッサ 70」（1970 年）

当時、ジャズ・ミュージシャンの多くはホテルやクラブなどで演奏することが多く、彼ら自身がやりたい音楽をやる、というよりは、客の求める音楽の中で自分たちの音楽性を表現し盛り上げていくことが必要だった。そのため、幅広いジャンルを雑食的に取り込みながら、新たなサウンドで盛り上げていく野心的なバンドが頭角を現していった時代でもあった。

ちなみに、ニロ・エスピノーサは 1970 年代にはハイメ・デルガード・アパリシオのオルケスタにメンバーとして参加していた時期もある。そんな二人が、それぞれのスタイルで時代を切り開き、1960 年代から 1970 年代のペルージャズ・シーンを象徴する存在として活動したことが、続く軍政後の 1990 年代の新たなジャズの流れを準備したのだともいえるだろう。

次回のジャズ編（その 3）では、ラテン化したジャズのペルー化がどのように進行し、ペルー音楽を取り込んでどのように大衆化していったのか、はたまたいかなかったのかをご紹介できればと思います。

ミゲル先生のメキシコ食巡り

サツマイモとチョコレートのデザート

Postre de camote con chocolate

サツマイモの歴史は、はるか昔にさかのぼります。

1988 年の調査報告によると、サツマイモの原産地はメキシコのユカタン半島で、ベネズエラが起源の品種もあります。

サツマイモを示す単語は、camote だけでなく、boniato や、batata、papa dulce、patata dulce とも呼ばれています。

マヤの人々はさまざまな形でサツマイモを食べてきました。重要な栄養源でした。

マヤ以外のメキシコのほかの地域でも、ずっと昔から食されています。

15 世紀末、クリストバル・コロンが、はじめてヨーロッパにサツマイモを伝えました。ヨーロッパから、アジアやアフリカにも伝わっていきました。

私が子どものころ、母はさまざまなサツマイモ料理をつくってくれました。いろいろなデザートもつくってくれました。私たち兄弟はデザートづくりを喜んで手伝っていました。

今回はそんなおいしいサツマイモのデザートです。

材料（4人分）

- サツマイモ　中2個
- 甘いビスケット　4枚
- チョコレート　４切（35グラム）
- 干しぶどう　適量
- クルミ　適量
- 牛乳　100cc

作り方

1) サツマイモを洗って、やわらかくなるまでゆでる。皮をむき、ボウルのなかでペースト状になるまでつぶす。
2) 牛乳を電子レンジであたためる。
3) あたためた牛乳をボウルに入れ、チョコとビスケットを加え、ビスケットとチョコが溶けるまで、よく混ぜる。
4) 混ぜたものをガラスのコップなどの器にスプーンでよそう。
5) 干しぶどうとクルミをトッピングして、冷蔵庫で冷やしたらできあがり。

ムネチャンのLA情報拾い読み・斜め読み

2021年10月

小林　致広

（1）ペルー、テロの10年の強制不妊手術

国際先住民問題作業グループ（IWGIA）は今年8月、フジモリ政権（1990~2000年）の先住民女性に対する強制不妊手術に関する報告書を刊行した。フジモリ政権は1996年から「全国リプロダクティブ・ヘルスと家族計画プログラム」を展開し、避妊法の普及だけでなく、農村部の先住民女性の出生率を抑制する強制不妊手術を実施していた。強制不妊手術された女性は約27万、男性は約2.2万人とされる。真実和解委員会の報告書は、不妊手術を受けた女性を暴力の被害者と認定しなかったため、司法手続きや救済が大幅に遅延した。

報告書では先住民女性に対する強制不妊手術がジェノサイドにあたるかどうかについても議論され、国内外の状況も分析されている。ペルーでは武力紛争により法の支配が破壊され、強制不妊手術を含め多くの人権侵害が横行していた。強制不妊手術に関する告発は、21世紀初頭から提出されていたが、受理された告発が審議されることはなかった。2014年、腐敗行為と人権侵害で有罪となったフジモリ元大統領だが、その罪状に強制不妊手術による人権侵害は含まれていなかった。

2015年以降、不妊手術を受けた女性の証言が集められ、現在まで約7千件の証言が登録された。約1,300件の告発に対するフジモリ元大統領や元保健省大臣3名などの責任を問う審理は、2021年3月初めに開始された。5月の第2次大統領選挙キャンペーン中のケイコ候補は、「強制不妊手術ではなく家族計画」と抗弁を繰り返していた。9月中に予定されていた判決は何度も先送りされ、10月中旬の時点においても見通しが立っていない。

第二次選挙中(5月)の抗議

強制不妊犠牲ペルー女性連盟の抗議行動

出典：
https://bit.ly/2Viigv8
https://www.bbc.com/mundo/noticias-america-latina-56243650

（2）構造変革を求めるグアテマラの全国スト

7月29・30日、グアテマラ各地で、ジャマテイ大統領とコンスエロ・ポラス検事総長の辞職を求める抗議活動が展開された。トトニカパン県48カントン共同執行部、ソロラ先住民市長、シンカ民族議会が呼びかけた全国（多民族）ストには、先住民権威者、農民・学生・女性・フェミニスト運動や進歩的3政党（Movimiento Semilla, Movimiento Político Winaq, URNG-MAIZ　14/160議席）などが賛同した。スト呼び掛けの契機は、無処罰特別検察官（FECI）が大統領の外国鉱山会社からの賄賂疑惑の調査開始の直後、検事総長によるFECI代表フランシスコ・サンドバル解任である。自らに腐敗調査が及ぶことを怖れた前大統領ジミー・モラレス（2016～20年在職）は2018年5月にポラスを検事総長に指名したが、国連グアテマラ無処罰問題対策国際委員会（CICIG）が解散した2019年末以降もFRCIは独自調査を進めていた。

広範な怒りの対象となったのは、2015年から続く腐敗関係者摘発の遅延だけではなく、栄養失調対策などの保健・人権部門への資金削減と議員歳費増額（2020年11月）、COVD-19禍やハリケーン被害に対する無責任な対応もあった。グアテマラを私有地のように扱ってきたCACIF（農商産業・金融協会調整委員会）に代表されるビジネス界、政府関係者、軍部、外国企業など「腐敗の盟約」と呼ばれる支配的・抑圧的な体制への反発である。

7月末の全国ストは、首都圏における官庁前での集会、トトニカパン県におけるパンアメリカン道路封鎖という形で展開された。多民族国家にむけた制憲議会構築を提案している農民開発委員会などは、大統領辞任を求め、8月以降も抗議行動を展開している。

大統領と検事総長辞任要求の全国（多民族）スト

出典：https://www.no-ficcion.com/project/epicentro-paro-plurinacional
https://nacla.org/paro-nacional-guatemala-exige-cambio-estructural

（3）サポテコ共同体、風力発電開発差止を勝取る

フチタンや行政区域にあるラ・ベントサ、近隣のウニオン・イダルゴなどの先住民サポテコは一つの農地共同体を構成している。オアハカ市にある第 13 巡回区行政第 1 法廷はフランスの風力発電企業（EDF）のグナ・シカル風力発電所建設中止を求める先住民サポテコの差し止め請求を認める判決を下した。ウニオン・イダルゴとフチタン行政区ラ・ベントサにまたがる土地に建設予定の EDF 発電計画（2016 年認可）は、252 メガワットの出力の風力発電基地の設計から建設、操業、維持管理などが含まれていた。

記者会見で、テワンテペク地峡土地領域防衛先住民族会議のベティーナ・クルス、「地峡はわれわれのもの」キヤンペーンのマリオ・キンテロ、全国先住民議会のカルロス・ゴンサレスは、昨年のサリナ・クルスの州地区第 6 法廷の判決に対する控訴が認められたと述べた。「グナ・シカル風力発電建設に関連し、フチタンの農地共同体の共同使用の土地を、部分的あるいは全面的に、期限または無期限に、私的な利益のために使用する業務を関連諸機関が行うことを差し止める」

この判決はメキシコの様々な農地共同体にとって歴史的なものである。メソアメリカでも先住民の割合が高いフチタンの農地共同体は、1960・70 年代の反対運動に対する州・連邦政府による弾圧で、50 年近く共同体の代表組織が作れなかった。判決は土地を防衛する闘いを展開する先住民にとって重要な勝利である。なぜなら、全国先住民庁は共同体に対してモデル的な開発を押し付けてきたこと、政府や企業による先住民の人権侵害が明らかにされたからだ。地峡部では先住民の自治や自由な意思表明が尊重されずに、すでに 29 の風力発電基地が建設されている。

「建設計画に反対すれば、先住民は暴力や脅迫にさらされる。行政当局者は買収され、フチタン市域の農地共同体の権利を行使する先住民が脅迫されている」。記者会見の最後に、連邦政府、州、行政区に対し、判決結果を尊重し、土地を占拠し続ける私企業への支援をやめるよう要求した。

出典：Aristegui Noticias　2021 年 9 月 22 日

（4）撤去コロンブス像の後には先住民女性像？

昨年の 10 月 12 日、メキシコ市レフォルマ通りのコロンブス像撤去行動が呼びかけられた。その 2 日前、1892 年設置から老朽化した像を補修するという名目で、市当局はコロンブス像を下段のラスカサスやペドロ・デ・ガンテなど 4 名の神父像とともに撤去した。米国の BML 運動と関連して LA 諸国でも起きた植民地主義的なモニュメントの見直しの一例である。

「世界先住民女性の日」に相当する 2021 年 9 月 5 日、メキシコ市のクラウディア・セインバウム市長はコロンブス像の代わりに先住民女性の像設置を検討していると表明した。当初ペドロ・レジェス制作「オルメカ女性トラーリ（大地）」が候補だったが、オルメカ女性の容貌は人種差別的などの批判を受け撤回された。10 月 12 日、年初にベラクルス州アマシャックで発掘された女性像のレプリカを載せる方針が公表された。コロンブス像を戻せという署名活動もあったが、修復後はポランコ地区のアメリカ公園に移設されることになった。

9 月 25 日早朝、女性殺害を告発してきた女性グループ「反記念碑 VivasNosQueremos」によって、木製女性像が台座に据えられた。「闘う女性たちのロータリー」と書かれた台座を囲む鉄柵には、不正との闘いで暴力・弾圧に曝され犠牲となった女性の名前が書きこまれていた。市当局が何度も塗りつぶしたが、そのたびに、正義を求める戦いで命を失った女性たちの名前が新たに書き込まれ続けている。

当初案のオルメカ風？先住民女性像

ワステカの大地と豊穣の女神テームのレプリカ案

闘う女性たちのロータリー

出典：https://www.facebook.com/AntimonumentaVivasNosQueremos/posts/1173168493174838

編集後記

お詫びと訂正：前号（177）の「コロンビアに住んで44年」の著者名を高橋弘昌さんとすべきところ、高橋昌弘（誤り）となっていました。初歩的な確認ミスをお詫びするとともに、PDF 版や紙媒体で受け取られた方々には、修正していただくようお願いします。Homepage と Facebook では、すでに修正版となっています。

この２年間、コロナ禍のため LA 諸国との往来がかなり制限され、「そんりさ」に掲載できる現地報告の確保がとても難しくなりました。また、印刷作業に集まることも難しく、PDF 版配布を先行させることも何度かありました。2022 年からは、この事態が多少なりとも改善できればと思っています。（小林　致広）

次回「そんりさ」印刷作業は東京で、1月15日（土）
発送作業は関西で、1月22日（土）の予定です。
参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

最近の記事

Vol.177　コロンビア　混乱の背景	Vol.174　ナルコ回廊再び－北部最前線
Vol.176　メキシコ･オアハカ州地峡部の自律的女性議会	Vol.173　コロナ禍のラテンアメリカ
Vol.175　『裏切者』が米墨政府の汚職と麻薬カルテルの内実を暴く	Vol.172　ナルコ回廊再び－北部最前線
	Vol.171　革命から 40 年を迎えたニカラグア

メーリングリスト

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org まで、ご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

会員の種類

☆会員　　：年8,000円…会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆学生会員：年5,000円…会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆賛助会員：年10,000円(一口)…総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆購読会員：年4,000円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先
〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町20-15 太田方
TEL 075-862-2556(留守電)

お問い合わせは、E-MAIL、手紙、もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。
ホームページ http://www.jca.apc.org/recom
E-mail recom@jca.apc.org
Facebook https://www.facebook.com/recomsonrisa/

郵便振替口座:00110-7-567396
日本ラテンアメリカ協力ネットワーク
レコム口座　176 万 9576 円
グアテマラ基金　55 万 0290 円
(2021 年 10 月現在)

そんりさ（SONRISA）　178 号
2021 年 10 月 16 日発行
日本ラテンアメリカ協力ネットワーク
(RECOM)　定価　400 円